

編集後記

本研究会はこれまで四五回開催された。研究会の機関誌である本誌は二〇〇六年から毎年上半期と下半期の二回発行、三年間で六号となる。

雑誌の文字組・レイアウトは「一太郎」で行っている。当初は「一太郎8」であったが、バージョンアップして9・10、そして「二〇〇五」を経て、いまや「二〇〇八」である。

日本の首相はマンガ太郎、野党の党首・一郎は政治献金をめぐって追求されているが、「一太郎」はマジメでエスプリがある。一太郎なくして雑誌なしという感じだ。日本語、特に縦書きのとき威力を発揮する頼もしい友である。ルビを振ったとき、行間が広がらないのは常識だが、他に「裏技」がたくさんある。例えば、裏技を駆使すると踊り字「々」「々」ができる。これは、作字したものではない。作字した文字はパソコンが

変わると文字化けしてしまうので使えない。これは「々」と「々」を使って、文字間を密着するまで縮めたものである。これは文字化けしない。

一太郎に熟達したため、「彼は販売元からインストラクターにスカウトされたらしい」とウワサされたが事実ではない。事実、電話で複雑な操作のサポートをうけた際、逆にインストラクターにある操作方法を教えたということに過ぎない。

本研究会の科研はあと三年間。雑誌は年二回で、一二号までの発行が予定されている。今号がちょうど折り返しになる。そこで、これまでの研究会の活動と五号までの総目次を掲載した。

書物・出版研究の進展はめざましく、本誌も注目を浴びており、「バックナンバーを欲しい」というご要望をいただくことがしばしばある。発行部数は七〇〇〜八〇〇部だが、

著者贈呈分と、各研究機関・研究者に発送するとあまり手元には残らない。本誌は「HERMES-IR」（一橋大学機関リポジトリ）に登録されており、インターネットで閲覧可能となっている。バックナンバーに関心があるかたは、利用していただきたい。

この六号は当初頁数が一〇〇に満たなかった。もちろん、それでも構わない。が、背文字を一号の二二八頁のときの厚さでつくった。見やすい方がいいと思つて大きくしたが、あまり本が薄いと背文字を小さくしなければならぬので、ハラハラする。その後、執筆に名乗りを上げてくださる方が何人もおられて救われる思いがした。一太郎も喜んでいゝ。今後も「うしろの一太郎」とともに組み版を頑張りたい。一二号とはいわず何号でも。ふるつてご投稿されんことを願ひする次第である。

（小川記 前号後記とも）